

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：34406

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520138

研究課題名(和文)時の視覚化としての星曼荼羅の研究 - 数理天文学と密教学の融合による絵画 -

研究課題名(英文) A STUDY ON STAR MANDALAS AS VISUALIZATION OF TIME - PAINTINGS OF A COMBINATION OF MATHEMATICAL ASTRONOMY AND ESOTERIC BUDDHISM -

研究代表者

松浦 清 (MATSUURA, Kiyoshi)

大阪工業大学・工学部・准教授

研究者番号：70192333

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：星曼荼羅(北斗曼荼羅)の構成要素と構成原理は仏教の教義とは無縁な天文学の基礎知識に基づいており、仏教はその知識を教義に利用している。星曼荼羅の図像の原型は、現実の天体配置を把握する際に必要な「基礎的天体モデル」とでも称すべき一種のイラストと推測され、それにインドと中国の暦法や西洋のホロスコープ占星術が融合して、星曼荼羅は成立した可能性を研究論文にまとめた。また、星宿信仰の歴史的展開を解明するには、近世の関連作品の分析が重要であることも、他の研究論文において指摘した。

研究成果の概要(英文)：The theory and components of Star mandalas (Mandalas of the Great Dipper) are based on knowledge of astronomy, which is originally unrelated to Buddhism but accepted in the Buddhism faith. In my latest report, I have presumed that the prototype of iconographic pictures in Star mandalas is an illustration of "the basic model of the celestial bodies" indispensable to understand the real celestial order, and that, fusing this prototype, Indian calendar, Chinese calendar and the Western horoscope together, Star mandalas are formed. Also, in another report, I have represented the significance of analysis of other related paintings in Edo period so as to clarify historical aspects of faith in stars.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：星曼荼羅 北斗曼荼羅 図像 星宿 数理天文学 占星術

1. 研究開始当初の背景

(1)星曼荼羅(北斗曼荼羅)の成立に関する研究には、従来、三説が知られている。すなわち、武田和昭『星曼荼羅の研究』(法蔵館、1995年)、林温『妙見菩薩と星曼荼羅』(至文堂、1997)、松原智美「北斗曼荼羅の方形式と円形式 - 成立の経緯と曼荼羅デザイン理論からの解釈 - 」(『奈良美術研究』、2008)である。それらは、いずれも星曼荼羅を經典や図像といった仏教美術の枠内で理解しようとした研究成果である。しかし、星曼荼羅の表現は天体の物理的な現象と無関係ではない。例えば、星曼荼羅に描かれる十二宮と二十八宿は天空の黄道と白道とを反映しており、それらの配置は、仏教の教義によって決定されているのではなく、天体の摂理すなわち科学的な根拠による。

(2)天体の物理的な現象は「時」と不可分に結びついており、星々を一定の列次で配置する星曼荼羅の構図にも「時」が反映していると解釈される。星曼荼羅と密接な関連性をもつ『宿曜経』や『七曜攘災決』などの各種經典に、ホロスコープ占星術の基本が明記されていることは、このことに直結する。しかし、密教の呪術性と自然科学の客観性とは相容れないものであるとの思い込みが一般には強かったためか、従来の星曼荼羅の研究においては、数理天文学の観点はその研究手法にはほとんど取り込まれることがなかった。ホロスコープ占星術は、運命あるいは未来予告という呪術性と数理天文学が結び付いた産物である。

(3)密教經典に記述された天文学の知識は、占星術としての側面を偏重するものではあるが、星曼荼羅の成立は、まさにこの占星術の技術的な役割が作品に反映したものと解釈される。このように、天文学ならびにホロスコープ占星術と密教との融合の中から星曼荼羅が成立した可能性が高いと推測される。このため本研究では、数理天文学という自然科学が呪術的な密教とどのように融合し、何が視覚化されているのかを、「時」という概念を中心に据えて解明することを研究の出発点としている。つまり、「時」を描く星曼荼羅という観点で星曼荼羅の成立を捉え直すという着想が研究の背景である。

2. 研究の目的

(1)円形式の星曼荼羅の場合、中尊である一字金輪の近くに水平線が描かれているが、その表現の重要性については、従来全く見過ごされている。それは、水平線の線分の両端に太陽と月を配置するという特徴的な表現のことであり、これによって月は満月であることが理解される点である。十二宮と二十八宿の対応関係も合わせて、太陽と満月はそれぞれ西と東に180度離れた位置に配置されていることになる。奈良・法隆寺本(甲本)のほ

か、いずれの円形式星曼荼羅においてもこの表現は共通しており、太陽が牛密宮に、満月が心宿に位置している。

(2)円形式星曼荼羅に示されたこの表現は、春の季節の旧暦15日に対応するため、釈迦の誕生日を想起させる。釈迦の誕生日はインド暦におけるヴァイシャーカ月の満月とされる。日本では中国と同様に旧暦の4月8日を仏生会とするのが一般的であるが、「バイシャーカ」はパーリ語の「ヴィサーカー」を経て、「ウエサク」へと転化し、その伝統は京都・鞍馬寺の「ウエサク祭」として残されている。毎年5月の満月の日に、東山から上る満月を迎えて釈迦の誕生を祝う行事である。

(3)個人の誕生日の時刻における天体相互の位置関係から個人の運勢を占うのがホロスコープ占星術であり、その具体的な技術は平安時代後期の宿曜勘文として伝わっている。この宿曜勘文を視覚化したものがホロスコープ図であり、ホロスコープ図の十二宮、二十八宿、方位の関係は、回転方向が逆であることを除けば、円形式星曼荼羅のそれらの関係と完全に一致する。このことから、円形式星曼荼羅には釈迦の誕生日が描かれている可能性が推測されるが、不明な点も多く残されている。

(4)ホロスコープ占星術にとって重要なのは、太陽と月のほか、五惑星や羅睺・計都などの九曜の位置であり、それらの確定には時刻の情報が必要である。釈迦の誕生については、この情報が明確でなく、また、計算によって九曜の位置を確定するにしても、暦元をいつにするかによって計算結果が異なる。九曜の位置が確定できなければ、ホロスコープ図を完成できず、九曜の位置の情報を星曼荼羅に反映させることはできない。特に、円形式星曼荼羅の最古の現存例とされる法隆寺本(甲本)と同(乙本)では、水星と月の位置が異なっており、羅睺・計都の図像の典拠も『梵天火羅圖』と『九曜秘曆』と異なりながら、いずれも九曜を北の方位にまとめて配置している。この九曜配置は天文学の知見からは特殊なものと考えられ、釈迦の出生時刻の不明確さを踏まえた密教的な解釈である可能性が考えられる。あるいは、『史記』『天官書』に示されたような中国古来の天文観かも知れない。

(5)このように、不明確な情報を整理して、各種經典の具体的な記述と対応させることにより、五惑星や羅睺・計都の配置が星曼荼羅の中でどのような意味を持つのかを考察することが重要な課題である。また、円形式の星曼荼羅と方形式の星曼荼羅がどのような関係にあるのかも明確にする必要がある。

(6)以上を踏まえ、現存する星曼荼羅の五惑星ならびに羅睺・計都の配置を分類して、その特色を整理し、関連経典ならびに図像との比較を通して、その意味を考察することが研究の具体的内容である。

3. 研究の方法

(1)現存する星曼荼羅について、特に九曜の表現を中心に、関連経典と図像との比較を通して特色を整理し、ホロスコープ占星術との関係を考察した。これに関しては、これまでの研究成果としてすでに収集した星曼荼羅画像データベースを十分に活用した。

(2)鎌倉時代以前に制作された星曼荼羅を当面の考察対象とし、必要に応じて、北斗七星を描く作例なども取り上げつつ、図像的な比較検討をおこなった。その際、ホロスコープ占星術が西洋占星術の展開であることに関連して、西洋の十二宮の図像も収集する必要がある、いずれの図像解析のためにも作品の写真データの収集が前提となるため、写真撮影の継続を研究計画の基本とした。

(3)収集した星曼荼羅画像データベースに新たな画像情報を加え、星宿データベースへと拡張させることにより、方形と円形の両者にわたる星曼荼羅の全体像の解明をめざした。

4. 研究成果

(1)星曼荼羅の構図における二形式すなわち方形形式と円形式の構成原理ならびに図像の成立について考察した。方形形式の成立を東密の寛空とする『玄秘鈔』の記述と、円形式の成立を台密の慶円とする『覚禅鈔』の記述は、ともに多くの問題を含んでおり、必ずしも事実を正確に記述したものと解釈できない。星曼荼羅は天文の基本モデルを絵画作品として提示したものであり、その基本モデルに関する知識は寛空や慶円の時代をはるかに遡る古代から人類が受け継いできた知識である。円形式の構成原理については『密教美術と歴史文化』(法蔵館、2011年5月)に「星曼荼羅の成立とホロスコープ占星術 - 円形式の構成原理を中心に - 」と題する研究論文として発表した。

(2)星曼荼羅の構図と構成要素を分析すれば、星曼荼羅は数理天文学の基礎知識を仏教が自らの宗教体系に組み込んで成立したものであることが理解できる。その際の解釈にいくつかのバリエーションがあり、寛空の方形形式と慶円の円形式が代表的な二形式として継承されたと考える方が合理的である。仏教が利用した数理天文学の知識は占星術と密接に関連する知識でもあり、星曼荼羅の構図には時間に関わる理念が盛り込まれていると予想される。その理念を視覚化するために用いられたのが、中尊としての一字金輪仏頂尊とそれを取り巻く星宿の関係である。特に、

釈迦の誕生日が星曼荼羅の構成原理に関係している可能性について考察した。その仮説については『仏教美術論集 2 図像学 イメージの成立と伝承(密教・垂迹)』(竹林舎、2012年5月)に「星曼荼羅の構成原理と成立について」と題する研究論文として発表した。

(3)当該研究の主題である“時の視覚化”が星曼荼羅以外の作品ではどのように表現されているかを確認するため、大念佛寺(大阪市)が所蔵する「片袖縁起」を例に比較検討した。「片袖縁起」は近世の作品であるが、天体としての月が描かれており、天文学の基礎知識を援用しなければ作品の制作意図は理解できないことを解明した。詳細については『軍記物語の窓 第四集』(和泉書院、2012年12月)に「「片袖縁起」における時の視覚化について」と題する研究論文として発表した。

(4)従来言及されることがほとんどなかった江戸時代の星宿関連絵画に注目し、考察をおこなった。それは、星曼荼羅の展開として当然視野に収めておく必要性に立脚したものである。取り上げた作品は、北斗七星と九曜を伴う妙見画像(個人像)で、三十番神の墨書を伴っている。当該作品の北斗七星と九曜の図像は、流布本の星曼荼羅の対応図像をほぼ踏襲するのが特徴であり、江戸時代に出版された仏像図像集を典拠としていることが判明した。三十番神の信仰と習合しており、日蓮宗などの法華信仰が背景として想定される。研究成果は『交錯する知 衣装・信仰・女性』(思文閣出版、2014年3月)に「北斗七星と九曜星をとまなう江戸時代の妙見画像の一例 誤謬解釈を越えて」と題する研究論文として発表した。

(5)星宿信仰とは異なった観点であるが、月を愛でる和歌とその絵画化の一例として、歌人西行と月との関連性を若干考察した。研究成果は『西行学』第4号(西行学会、2013年8月)に「描かれた西行 弘川寺・西行記念館所蔵絵画作品を中心に」と題する研究論文として発表した。

(6)各種研究会において、星宿美術に関連する研究発表を口頭でおこない、また、星宿信仰に関係の深い天神画像について、大阪天満宮社報に新たな知見を報告した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

松浦清、描かれた西行 弘川寺・西行記念館所蔵絵画作品を中心に、西行学会学会誌、査読有、第4号、2013、50-80。

〔学会発表〕(計4件)

松浦清、誤った尊名表記を伴う九曜像を配

した江戸時代の妙見画像について、天文文化研究会(第11回例会) 2014年2月1日、常翔学園「大阪センター」。

松浦清、星曼荼羅にみる科学と宗教の融合、研究談話会(第4回) 2011年6月24日、大阪工業大学。

松浦清、星曼荼羅の中のホロスコープ占星術について、天文文化研究会(第8回例会) 2011年5月28日、大阪工業大学。

松浦清、片袖縁起絵巻 物語の背景と月の表現、関西軍記物語研究会(第71回例会) 2011年4月17日、関西学院大学梅田キャンパス。

〔図書〕(計4件)

武田佐知子編、思文閣出版、『交錯する知衣装・信仰・女性』、2014、671(207-231、松浦清「北斗七星と九曜星をともなう江戸時代の妙見画像の一例 誤謬解釈を越えて」)。

関西軍記物語研究会編、和泉書院、『軍記物語の窓 第四集』、2012、492(451-480、松浦清「片袖縁起」における時の視覚化について)。

津田徹英編、竹林舎、『仏教美術論集2 図像学 イメージの成立と伝承(密教・垂迹)』、2012、396(193-216、松浦清「星曼荼羅の構成原理と成立について」)。

真鍋俊照編著、法蔵館、『密教美術と歴史文化』、2011、649(121-151、松浦清「星曼荼羅の成立とホロスコープ占星術 - 円形式の構成原理を中心に - 」)。

〔その他〕

○講演会(計1件)

講演者：松浦清

講演表題：あさひ“ちょこっと”科学セミナー「星曼荼羅[ほしまんだら]-仏教の中の科学」

講演企画：大阪工業大学地域連携センター

講演年月日：2013年12月14日

講演場所：大阪工業大学

○依頼原稿(計3件)

松浦清、表紙解説「菅公像」、てんまてんじん(大阪天満宮社報) 査読無、第65号、2014年1月1日、pp.1-2。

松浦清、表紙解説「束帯天神像」、てんまてんじん(大阪天満宮社報) 査読無、第63号、2013年1月1日、pp.1-2。

松浦清、表紙解説「束帯天神像」、てんまてんじん(大阪天満宮社報) 査読無、第61

号、2012年1月1日、pp.1-2。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松浦 清 (MATSUURA, Kiyoshi)

大阪工業大学・工学部・准教授

研究者番号：70192333